

「タウンミーティング2005 in 和歌山」 県センターの始動イベント 近畿で初開催

地球温暖化の現状と地域で可能な取り組みについて学ぼうと、WeNETが中心となり9月10日、和歌山地域地場産業振興センターで、「和歌山からつくり脱温暖化社会＝タウンミーティング2005 in わかやま」（主催：環境省きんき環境館）が開催され、一般と関係者あわせ、約170人が参加した。

同イベントは、WeNETが県知事より同月1日付で「和歌山県地球温暖化防止活動推進センター」の

て説明、ネットワーク形成を目的とした2度の和歌山環境フォーラムの開催などを紹介した。続いて楠本隆県環境生活部長と大木浩全国地球温暖化防止活動推進センター代表（京都議定書を採択したCOP3会議の議長）、麻生勝環境省近畿地区環境対策調査官事務所長が祝辞を述べ、県センターの船出にエールを送った。



全国地球温暖化防止活動推進センター
代表 大木 浩氏

指定を受けてから初の催し、また環境省きんき環境館としても初めて主催するタウンミーティングであり、まさに「脱温暖化社会」を「和歌山からつくり」という熱気に満ちた熱気のこもるイベントとなった。

この催しでは、まず最初にWeNETの重栖隆代表理事が、指定を受けるまでの7年にわたる活動につい



この後、地球環境と大気汚染を考える全国会議（CASA）の早川光俊氏と（財）ひょうご環境創造協会の菊井順一氏が地球環境の現状と対策について講演（次ページに紹介）、これを受けた意見交換では参加者から多くの発言があり、大量生産・大量消費・大量廃棄からの転換等が必要であること、足元から行動することの重要性などを確認、県センターの今後の活動に期待を込めた。

温暖化防止地域イベント、紀南・紀北で開催（4面に関連記事）

■ 「ストップ温暖化～熊野の森から環境の世紀を考える～」

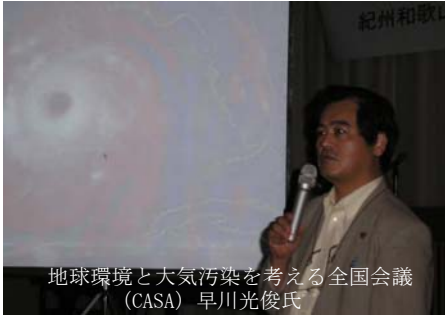
3月5日（日）10:00～17:00 和歌山県情報交流センター・ビッグU（田辺市）
（宮脇昭氏の講演、パネルディスカッション、環境展示、他）

■ 「紀ノ川環境フォーラム2006～環境の世紀に活かそう紀ノ川の恵み～」

3月11日（土）10:00～17:00 あじさいホール野外イベント広場（かつらぎ町）
（茶粥提供、産直販売、環境展示、エコライブ、リレートーク、紀州レンジャーショー、他）

「100年の気温上昇を2度以下に」

早川氏は、地球温暖化による海水温上昇は台風を巨大化させたりサンゴ礁を白化させていると説明。このままだと2030～50年にサンゴは絶滅し、CO2を吸収する植物プランクトンがエサ場をなくして減少することで、さらに温暖化が促進されると指摘した。またヒマラヤやヨーロッパの氷河、キリマンジャロの雪、北極・グリーンランド・南極の氷も減少して生態系に甚大な被害をもたらしていること、マーシャル諸島などが水没して国がなくなる現状を報告した。



地球環境と大気汚染を考える全国会議
(CASA) 早川俊氏

続いて日本の状況について、ナガサキアゲハの生息域が年々北上し今は関東にまで達していること、南方系のクマゼミが増え、本州ではブナ林が消滅する恐れがあることなどを紹介した。

早川氏は、「このままだと気温は100年後に5.8度上昇し破局的な事態になる」と警告、「温暖化自体は止められないが気温上昇を2度以内に抑えることが目標になる」とし、「京都議定書の目標を達成したうえで2013年以降をどうするかがポイント」と解説した。

また、温暖化防止に向けた具体的な行動では、省エネの推進か自然エネルギーへの転換以外に方法はなく、風力発電や太陽光発電などを市民の結束で推進すること、エネルギーの8割以上を消費する先進国の我々が率先して活動することが大切であると語った。

「やっちゃった地球温暖化、やばい！」

菊井氏は、まず地球の46億年の歴史を1年のカレンダーにたとえ、大晦日23時59分58秒の時点で地球を壊すかもしれないことになって「やっちゃった、やばい！」

が今だと強調、その原因を人口の増加や森林減少等に起因する温暖化と

指摘した。日本でも、冷凍食品や宅配便・携帯電話の普及等がエネルギー消費を加速しているほか、コンビニやゴミ排出量の増加など暮らしの総和が温暖化という結果を生んでいる。脱温暖化社会の構築に向け、まず京都議定書の公約通りCO2を6%削減するため、大量生産・大量廃棄のシステムを見直すこと、また家庭での省エネ行動の実践と省エネ家電へ変換することが不可欠であり、「一人一人の取り組みが社会を変える」のであり、「その一人一人の国民の意識を改革するには市民・地域社会の取り組みが決定的」としたうえで、その役割を県センターが担っていると話した。

また菊井氏は、太陽光発電による電力供給が全国一となり、さらに低公害車やエコマーク認定商品の購入促進、グリーンコンシューマーの拡大など、地域の活動拠点として脱温暖化への道を推進している兵庫県センターの状況を紹介、和歌山県センターも地域に根ざし活動してほしいと激励し講演を結んだ。



(財)ひょうご環境創造協会環境創造部長
菊井順一氏

和歌山県地球温暖化防止活動推進員のコーナー

第2期の養成講座、始まる

昨年に続き、「和歌山県地球温暖化防止活動推進員の養成講座」が12月4日、県経済センターで始まった。昨年は和歌山県の主催だったが、推進員の育成支援を主要業務のひとつとする県地球温暖化防止活動推進センターが指定されたため、今年と同センターが主催して受講生を募集、37人が応募した。昨年、推進員に委嘱された中村美由紀さんらWeNETのメンバーが

中心となって講習内容を企画し、運営に当たっている。

第1回の講座は、県環境生活総務課の守吉副課長の挨拶と重栖代表理事の趣旨説明の後、自己紹介や意見交換等を行って緊張をとる「アイスブレイキング」でスタートした。

続く講義では、「地球温暖化の現状と社会背景」と題し気候ネットワークの田浦健朗事務局長が、予想以上に進む温暖化や、暮らし・経済への悪影響を紹介、また、その原因が人間の活動にあることや京都議定書的重要性、国内の温暖化対策の進展状況、そして省エネ

やグリーンコンシューマー等について解説した。

次に和歌山地方気象台の山下政司次長が「和歌山の気候変動の状況」と題し講義。和歌山市付近では戦後、100年あたりに換算して2.6℃もの急激な気温上昇が起きていることを豊富なデータから紹介したほか、熱帯夜の増加、冬日の減少、サクラの開花やツバメの飛来が早まっていることなど、温暖化を疑わせる具体的



事例を紹介した。また和歌山市立こども科学館の土井浩教育主事は「温暖化と和歌山の生

物分布」と題し、自ら足を運んで確認した事例を解説。アオマツムシやタイワンウチワヤンマなどの南方系昆虫の出現や、海水温の低い古座から新宮と和歌山市加太以外の海岸では「磯やけ」が進み、生態系が崩れていることなどを写真で紹介した。磯やけの原因は高水温のほか水質悪化なども挙げられるという。

貴重なデータを目の当たりにして受講生らは温暖化の現状を実感、推進員の重要性を肌で感じていた。この講座はテーマごとの講義とワークショップ（グループ討議）の2構成で全5回行われる予定。

スキルアップ研修について

今年3月に和歌山県より委嘱された私達 和歌山県地球温暖化防止活動推進員が活動力を高められるよう支援することを目的に、和歌山県地球温暖化防止活動推進センターであるWeNETが企画・運営するスキルアップ研修が開催されることになり、その会員（推進員も含む）が9月上旬から集まって相談を重ねた結果、次のような内容で開くことになりました。

研修は全3回、11/20・1/22・2/19で、県内を3ブロック（和歌山市・紀北・紀南）に分け、それぞれの地域の実情に合った温暖化防止推進活動を考え、できれば実践し、それを和歌山県が現在策定中の「温暖化対策地域推進計画」に反映させるねらいです。

11月20日には、第1回目が和歌山大学から谷川寛樹先生をお迎えし、温暖化の現状やCO2排出のメカニズム、県内の様子等をお聞きした後、和歌山、紀北、

紀南に分れた3分科会で、これからどのような活動をしてゆくかを相談、私が参加する紀南では、森をテーマにした活動をする事が決まりました。いずれの地域も、これを機に継続して話し合うことになりましたので先が楽しみです。 報告：多田祐之



『省エネの達人』、温暖化防止活動推進員で NPO 環境を考える会リベラル代表の川口美智子さんに、冬の省エネの一例を教えてくださいました。

『もったいない』はケチじゃない

12月となり、冬支度に忙しくなってきました。我が家では、石油ストーブを暖房だけでなく、煮物の調理やお湯を沸かすのにも利用しています。更に沸いたお湯を湯タンポに入れ、古バスタオルで包み古バスタで結ぶ（廃物利用）と、コタツ代わりに朝まで温かくぐっすり眠れます。このように物を賢く使っていく工夫やエネルギーを無駄なく効率的に利用する事が、電気やガスの節約に繋がっていきます。



まず、家の中で『もったいない』探しをされてはいかがでしょうか？ 家庭の省エネはそこから始まります。「電気のスイッチ消し忘れ」「食材の購入の仕方」「シャワーの使い方」等、ライフスタイルに潜んでいる無駄を見直し、自分の家庭に合った省エネに気づき、無理をせず楽しみながらCO2の削減を進めてみましょう。

3月 田辺とかつらぎで環境イベント

熊野の森から考える（田辺）

地球温暖化防止の地域イベントを開くため、紀南地域でその準備を進められている「紀南イベント実行委員会」は9月27日より計4回の会合を持ち、以下のような企画を決定した。



イベント名（テーマ）は「ストップ温暖化～熊野の森から環境の世紀を考える」、3月5日（日）10:00～17:00、和歌山県情報交流センター・ビッグUで開催、構成は講演・パネルディスカッション及び環境展示。主催はこの実行委員会で作る「県センター紀南支部」とした。昨年来、「植林日本一」の宮脇昭（財）国際生態学センター所長を講師に和歌山の植生回復や森づくりについて学ぼうとの計画に、新エネ・省エネなどの展示を加える企画となった。パネルディスカッションには宮脇さんのほか、細谷昌子さん（わかやま喜集館講師）、林雅彦さん（国際熊野学会会長）、中村太和さん（和歌山大学教授）、楠本弘児さん（熊野の写真家）が出演。新エネ・省エネ関係の団体に参加を呼びかけた展示等も計画している。 報告：橘 博昌

紀ノ川の恵みを活かす（かつらぎ）

温暖化防止地域環境イベントの紀北チームは10月24日に実行委員会がスタート、その後、12月12日までに全体の集まりと、展示や販売など会場関係の作業を行うグループと舞台イベントの作業グループの集まりを計7回開き準備を進めてきた。

イベントの名称は「紀ノ川環境フォーラム2006～環境の世紀に活かそう紀ノ川の恵み」。3月11日（土）10:00～17:00、かつらぎ町あじさいホールの野外イベント会場で開催する。企画内容は、紀ノ川の水にちなむテーマ展示や環境NPO、企業の紹介、紀ノ川源流の水で炊いた茶粥を無料で振舞うほか、環境農業団体が旬の農産物や食べ物を直売する。一方、舞台上は、高校生の和太鼓演奏を皮切りに、和歌山県の環境



をテーマとした「紀州レンジャー」の着ぐるみショーやクイズ、自転車発電によるエコライブ、紀北地域の環境団体、学校、企業等が参加する環境活動リレートークを予定、実行委員会は親子が楽しめるイベントにしようと張り切っている。

県電器商業組合＋NPO環境市民＋WeNETが協働

省エネラベル導入と環境マイスター認定講座開催へ

WeNETは、家電小売店の店頭で、製品の販売価格に10年間の電気代を加えて表示することにより、省エネ型家電製品の普及を図る省エネラベルを県内に導入するとともに、このラベルの意味を正しく説明することを含め環境に良い製品について豊富な知識をもつ販売員（＝環境マイスター）を認定する講座を開催する。和歌山県電器商業組合、京都のNPO環境市民

との協働事業。省エネラベルはすでに全国の多くの地域で導入されているが、環境マイスターの認定は内閣府の委託を受け、和歌山と山形で社会実験的に取り組まれる全国初の試みであり、温暖化ガス削減への効果が確認できれば全国に広がる可能性を秘めている。講座は1日7時間で2日間。1月28日と2月8日、いずれもサンピア和歌山で開催される。

クローズアップ！ わたしたちの活動 (2)

このコーナーはわかやま環境ネットワークに参加する団体や企業、個人の活動記録と今後の展望を紹介します。

はしもと里山保全アクションチーム

～ いい汗かいて 郷土の縁を残したい ～

〈会の目的〉

ふるさと・橋本の豊かな自然を子孫に残し伝えたい。そのために、たとえ少しでも役立ちたい。そんな思いを抱いた者が集まって、1993年にこの会を設立し、次のような目標のもとに活動を続けてきました。



- ① 自らの作業や行動を通して、ふるさとの自然を守る。
- ② 作業する中で、里山・田園環境保全のための伝統技術や文化を学び・継承して、それを次世代に伝える
- ③ 市民参加による活動を通して、地域環境に対する市民の認識と愛着を高める。



〈会の活動〉

私たちは、「ふるさと演習林」と名付けた雑木林と、紀見峠の麓にある棚田の休耕田との2ヶ所(いずれも民有地を無償で借り受けたもの)を主たるフィールドとして、多様な活動をしています(写真は日頃の活動の一部)。



会員は、橋本市を中心に、大阪府からも10名以上の参加があり、現在51名です。

〈私たちの想い〉

放置や荒廃が進む里山・棚田全体から見れば、自分たちの関われるのは微々たる面積に過ぎません。けれど、ささやかながらも活動を継続していくことで、私たちの想いが多くの市民に理解され、その声が、やがては林業や農業を強力に支援する政策につながってい



くことを願っています。

また、山や田んぼでの作業は、自分たちの楽しみや癒しであると同時に、保水・洪水調節・土壌流出防止等の機能や、多様な生き物を育て生態系を保全する機能、ひいては地球温暖化防止という現在起っている様々な環境問題への取組みの一端を担っているのだという、ひそかな誇りも持っています。

連絡先 橋本市隅田町山内1017 (中岡準方)
はしもと里山保全アクションチーム
Tel/Fax 0736-36-1358

URL <http://homepagel.nifty.com/actsatoyama/>

食農部会 「消費者参加型米づくり企画」 初年度を終了、来年には新たな耕作地も

農家と消費者が共に米づくりを体験し、併せて休耕田の復活を目的とした「消費者参加型米づくり企画」は初年度の今年、農家・消費者合わせてのべ53人の参加を得て570キロの有機米を収穫、終了した。和歌山市安原の田んぼで行われた食農部会のこの企画は6月12日の田植えに始まり、7



初めてコンバインを体験する新規就農者

月10日の草取りと生き物観察会、8月17日の葉面散布、そして9月17日の稲刈りでは就農予定者がコンバインを体験するなど、豊かに実った稲に汗を流した。終了後には新米のおにぎりを参加者みんなでおぼり有機米の味を楽しんだ。企画を振り返り、企画者で紀州大地の会代表・園井信雅さんは「来年度は参加者が、収穫したお米を希望されれば、割安に提供できるシステムを取り入れたい」と語った。来年はさらに新規就農1人を受け入れる予定があり、本年度の耕作12アールに新たな耕作委託水田を加えて、この仕組みの拡充をはかってゆく。

滋賀県民講座で学ぶシックハウス問題

身近な生活環境が有害化学物質で汚染されていた場合、化学物質過敏症という病気になることがあります。その入り口がシックハウスであることが多いのです。一番、安らぎの空

間である我が家が危険なら大変です。10月27日に滋賀県で、行政、建築家、医師、被害者が「シックハウス問題を学ぶ」県民講座があり、シックハウス相談窓口の立場から、被害にあった方々の実態と解決法などを話させていただきました。また、被害にあっている6家族の方々とも話し合いました。高気密住宅は省エネで温暖化対策に一役かっていますが、その一方、シックハウス問題の一因にもなっています。環境問題は、表裏の問題を捕らえて考えることが必要ですね。この問題に関心のある方は、冊子「シックハウスがわかる」(学芸出版社)をお読みください。 報告：道本みどり

推進員関西合同研修会に参加して

11月21日、三重県津市で近畿2府4県と徳島・福井の推進員による「第3回地球温暖化防止活動推進員関西合同研修会」が開催されました。和歌山からは5人の推進員が参加、代表して中村美由紀さんが「紀州よさこい祭りにおける3Rの取り組み」を報告しました。この報告には他府県参加者の関心も高く、多くの問い合わせが寄せられました。また奈良県の「子供たちと共に環境教育」などの活動事例を聞き、有意義な研修会となりました。 報告：清水友

お知らせ

- *西出いづみさんが事務局専従を引き受けてくださいました。中学二年の男の子を持つお母さんで、愛称は「歌舞(かぶ)ちゃん」。歌って踊れる事務局員…で、事務所はますます明るく賑やかになりました。ぜひお立ち寄りください。
- *広報部はホームページ (<http://www.vaw.co.jp/wenet/>) に「会員ホームページへのリンク」を設け、会員でホームページをお持ちの方の登録をお願いしています。お申し込みはホームページの「ご意見・問い合わせ」まで

NPO わかやま環境ネットワーク通信「ういねっと」
第2号(平成17年12月20日発行)

発行：NPO 法人わかやま環境ネットワーク
代表理事 重栖 隆 事務局長 前岡正男
編集 吉岡恭子 中西茂美 堀 禎宏 松下靖彦
〒641-0051 和歌山市西高松1-6-4

TEL：073-432-0234 fax：073-421-6545

活動に参加して下さる会員を募集しています!

年会費：(個人・NPO・学校) 3000円

(事業者・公共団体) 一口 10000円

詳しくは事務局までお問い合わせください。

事務局地図

